大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

The Pilgrim's Progress 第一部について：物語のアレゴリーと語ることのアレゴリー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 直樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006232

The Pilgrim's Progress 第一部について
── 物語のアレゴリーと語ることのアレゴリー ──

近　藤　直　樹

物語の最後になって、今まで語られてきた物語は実は夢の中の出来事であった、と種明かしがなされることは、語りの手法として一つのクリッシェであり、今なお決して用いられることがなくなったわけではない手法である。近代小説に関する一応の定義からすれば、近代小説以前の作品とみなされる John Bunyan の *The Pilgrim Progress* (1678) も、夢の中の物語という手法を用いている。ただバニヤンは、最後になってから夢であったことを明かすのではなく、いきなり冒頭からその事実を語ることによって物語を始めている。

> As I walked through the wilderness of this world, I lighted on a certain place, where was a den; and I laid me down in that place to sleep: and as I slept I dreamed a dream. I dreamed....[1]

冒頭の第一文から、「夢」という語があらわれている。そして、この物語が夢の中の物語であることを読者が忘れないようにするためであるかのように、また、その事実を忘れている読者にはそのことを改めて喚起するためであるかのように、「私は夢の中で見た」とか「私は夢から目覚め、また眠り、再び夢を見た」という説明がところどころに挿入される。バニヤンは、夢を見ていることを、夢の物語であることを、強調していると考えられる。それが強調であることは、上に引用した冒頭の文章を読む前に、すでにこの作品のタイトルページによって明瞭に示されている。一目瞭然に、そこには 'DREAM' という語が最も大きな活字で、'Pilgrim's Progress' という題名よりもはるかに太い字体で書かれているのである。

この強調はいかなる理由によってなされているのであろうか。それはまず、「著者の弁明」の中でバニヤンが、自らの作品の正当性を聖書という権威によって証明しようとしている点との関連において理解されうる。バニヤンにとって聖書は絶対的な書物であり、[2] その聖書には、夢の中で神が語ったということが多く記されている。例えば、

> ところが神は夜の夢にアビメレクに臨んで言われた・・・　(創世記　20：3)
> その時、神の使が夢のなかでわたしに言った・・・　(創世記　31：11)
> しかし、神は夜の夢にアラムびとラバンに現れて言われた・・・　(創世記　31：24)
> 彼らが帰って行ったのち、見よ、主の使が夢でヨセフに現れて言った・・・(マタイ　2：13)

夢の中で語る者が神であれ神の使であれ、そこで語られることは、神を信じる者にとっては神聖であり、真理である。盲目的に受け入れなければならないことである。バニヤンは、この夢＝真理というパターンに従った。聖書の威光に依存して、夢の中での物語という枠組そのもの

に正当性を与えるのと同時に、その物語の真正さをも読者に伝えようとしているのである。その意味で、Felicity A. Nussbaum が *Grace Abounding to the Chief of Sinners* について言った、"Bunyan is creating a substitute personal text to replace the Scriptures as a devotional guide"(3) という評言は、*The Pilgrim's Progress* にも当てはまると言えよう。しかし、夢という枠組は、物語のための策略というよりも、もっと本質的にバニヤンの心性に根ざしたものであろう。夢は能動的に作るものではなく、受動的に見るものであるから、見た夢を語ったとしても、恣意的な作為という意識につきまとわれることはない。創作する者、創造する者は、ただ神だけなのであり、原罪を負った人間、そして原罪を意識する人間にとって、夢は自らの力の及ばないところにある。啓示のように、それは与えられるものなのだ。そうした啓示の体験について、バニヤンは *Grace Abounding* の中で次のように書いている。

> But when I had been long vexed with this fear [that my soul and heaven were lost], and was scarce able to take one step more, just about the same place where I received my other encouragement, these words broke in upon my mind, *Compel them to come in, that my house may be filled, and yet there is room* (Luke 14: 22, 23).(4)

このルカ伝の言葉をバニヤンの脳裏に送りこんだのは、超越的な存在、神、であるとバニヤンは考える。ちょうど、*The Pilgrim's Progress* の「著者の弁明」の中で、"I . . . / Fell suddenly into an allegory" と弁明する時、そこに神の導きを暗示しているように、バニヤンは神の力の支配下にあることを意識している。その上で、夢の語り手という立場に自らを置くことにより、キリスト教徒としての心性と調和した状態で筆を進めることができたのである。

神から与えられるもの、それは 'grace' である。それなくして人は無力であるというバニヤンの信念は、*The Pilgrim's Progress* を貫いている。最も象徴的なのは、主人公 Christian が天上の都への道を歩み始める以前の名前が Graceless であった、ということである。何らかの契機で、彼は恩寵なき者からクリスチャンになった。その契機については作品中で明らかにされることはないが、その契機自体が恩寵なのである。それは獲得するものではなく、与えられるものなのだ。それは、努力によって人が原罪をぬぐい消すことができないのと同じである。クリスチャンが 'burden'（重荷＝原罪）から解放される瞬間を、バニヤンは次のように描いている。

> He ran thus till he came at a place somewhat ascending; and upon that place stood a Cross, and a little below in the bottom, a sepulchre. So I saw in my dream, that just as Christian came up with the Cross, his burden loosed from off his shoulders, and fell from off his back; and began to tumble, and so continued to do till it came to the mouth of the sepulchre, where it fell in, and I saw it no more. (pp. 69–70)

まるで、クリスチャンの 'burden' が転がり落ちる音までが聞こえてきそうなこの有名な一節

が示そうとしているのは、彼の‘burden’が人為的な努力によるのではなくまったく自然に肩からすべり落ちた、ということである。キリストのみがそれを可能にすることができるのであるが、そのことに関してクリスチャンは、彼の導き手たるEvangelistから既にこう聞かされていた。

> No man was as yet ever rid of his burden by him, no, nor ever is like to be: ye cannot be justified by the works of the law; for by the deeds of the law no man living can be rid of his burden... (p. 55)

律法という人為的なものではなく、神という絶対的なものにすべてを委ねるべきであることを、Evangelistはクリスチャンに説いているのだが、クリスチャンが道に迷い誤るたびに現れるEvangelistの存在自体も、彼に与えられる恩寵である。ダンテがヴェルギリウスという案内者を必要としたように、クリスチャンはEvangelistの導きなくては天上の都へ到達することはできない。このことは、バニヤンが夢という啓示の中で物語を進めているということ、また、“Fell suddenly into an allegory”という弁明が暗示するような人為を越えた導きによる手法の選択、とパラレルをなしている。バニヤンは夢を見、クリスチャンはEvangelistの声を聞く、という受動的な全体的構図の中でこの作品は成立している。

たが、例外的にバニヤンが彼の夢に関与する場面が三つある。一つは、Slough of Despond’に落ちたクリスチャンをHelpが手を差しのべて助け上げた時、これを夢の中で見ている作者が直接Helpに話しかける場面である。

> Then I stepped to him that plucked him out, and said, Sir, wherefore, since over this place is the way from the City of Destruction, to yonder Gate, is it, that this plat is not mended, that poor travellers might go thither with more security?’ (p. 46)

ここでの‘I’は作者以外には考えられない。作者が夢の中の物語に直接入り込み、そして、登場人物であるHelpは作者のこの問いに直接答えるのである。ここでは、一瞬作者は登場人物となっている。二つめは、クリスチャンとFaithfulがVanityという町に至った時、そこで開かれているVanity-Fairについて、その歴史を作者が説明する場面である。今度は、作者は登場人物とはならず、“I will show you the original of it [Vanity-Fair].”(p. 125)、と直接読者に語りかけている。三つめは‘gardner’が「私」に直接語りかける場面(p. 197)である。

夢の中の登場人物と会話をかわしたり、夢の中にでてきた町について詳しく知っていること、これらは実際の夢においてはあり得ないことではないかもしれない。だとしても、その会話や説明を書き加えることは、夢の物語という構図と、夢の語り手という作者の立場に亀裂を入れることになるだろう。作品の統一性やその重要性についてバニヤンがどのように認識していたかはわからないが、この作品の結びの文章が、“So I awoke, and behold it was a dream.”(p. 205)であることを考えてみると、バニヤンは夢の物語という全体的構図に気を配っ

ていたとみなすべきだろう。それにもかかわらず夢の物語に彼が二度介入していることは、自らの作品に介入せざるを得ない性向を持った後の小説家ヘンリー・フィールディングの登場を予感させるものがある。また、夢の物語の語り手という立場は、サミュエル・リチャードソンが装った手紙編集者という立場と、質的に違いはない。バニヤンは、近代小説誕生の間近に立っていたのだ。ということはつまり、「著者による弁明」の存在が物語っているように、バニヤンは自分が何のために如何なるものを書いているかについて意識的であった、ということである。

だから、バニヤンは夢の物語という枠組を継持しながらも、それがフィクションであることを同時に感じていた。その端的な顕われは、*The Pilgrim's Progress* を書き上げた後に書き加えられた「弁明」――この事実は出版の賛否を友人に尋ねたという文意から明らかである――の中で、バニヤンはこの作品を 'my fancies' (p. 37) と呼んでいるということである。この 'fancies' という語の含意は、空想による創作と解さざるを得ないのであり、そこからピューリタンが嫌悪した虚構までの距離はほとんどない。また、虚構性の意識に関しては、タイトルページを注意深く見れば、そこにもうかがうことができる。そこでは、最も大きな活字で書かれた 'DREAM' という語の上の行に、最も小さな活字で "Delivered under the Similitude of a" と付されているのである。その数行下に、"*I have used Similitudes, Hos.* 12. 10." と書かれていることから明らかなように、この 'Similitude' という語は 'parable' (たとえ話) の意味である。'parable' を語るのは預言者であり、それは神の創造的行為に由来するのに対し、夢を見るのは信仰者であり、神への帰依につながる道である。前者の小説家へと至る立場と、後者の神の下僕であり続けるキリスト者としての立場、この両者のバランスの上に立ちながらバニヤンはこの作品を書いている。そして、その比重は、'similitude' と 'DREAM' という語の活字の大きさが如実に表わしている。

つまりバニヤンは、小説の萌芽を予想させる夢物語を書いているわけであるが、その手法として用いているアレゴリーについて次に考えてみたい。

アレゴリーという手法を意図的に選択したわけではないと示唆しつつ、聖書もまたその手法を採っていることを主張することによって、バニヤンはアレゴリーを正当化しようとする弁明を「著者の弁明」の中で行っている。物語を語る以上、何らかの手法を用いなければならないのであり、バニヤンはアレゴリーという手法を選んだのだが、それが聖書の権威によって正当化されるとしても、それはまた彼の物語にとって妥当でもなければならない。当時においてすらアレゴリーはすでに手あかのついた手法であったにもかかわらず、あえてバニヤンがそれに依った妥当性は、彼の物語が夢の物語であるという点において理解されうる。アレゴリーと夢の関連について、アンガス・フレッチャーはこう述べている。

> Many traditional allegories belong to a class which might be called a genre, namely "vision.".... The vision may not be psychologically defined; it may consist rather in the hero's being presented as somehow in isolation from the everyday world.... Bunyan uses the classic device: "I laid me down in that place to sleep, and, behold, I dreamed a dream."(5)

夢という非日常の世界の出来事は、解釈されるべき一つのヴィジョンとして、解釈を要請するアレゴリーによって語られることが妥当なのである。神の創意によるものであるかもしれない夢を正しく解釈することが必要であるように、アレゴリーもまた正しく解釈されなければならないのであり、アレゴリーによる夢の物語の語り手としてバニヤンは、'The Conclusion' の中で正しい解釈を読者に求めている。

Now reader, I have told my dream to thee,
See if thou canst interpret it to me,
Or to thyself or neighbour: but take heed
Of misinterpreting: for that instead
Of doing good, will but thyself abuse:
By misinterpreting evil ensues. (p. 207)

これは現代の読者受容論にもつながるような一節だが、しかしここにおいては解釈の多様性は容認されない。神の唯一性に由来する一つの真理が、一つの正しい解釈が、あるだけである。その正しい解釈によって読者は何を得ることができるのか。それについてバニヤンは、こう明確に読者に述べている。

This book will make a traveller of thee,
If by its counsel thou wilt ruled be;
It will direct thee to the Holy Land,
If thou wilt its directions understand:
Yea, it will make the slothful active be,
The blind also delightful things to see. (pp. 36-37)

クリスチャンのような巡礼者こそバニヤンの理想とするところである。妻子を捨ててまで巡礼の旅に出ることを決意したクリスチャンの姿は、イエスの教えを忠実に実行するその姿は（ルカ伝14:26)、説教をやめるようにという命令を頑として拒否し、妻子を残して投獄される道を自ら選んだバニヤンの姿と重なる。バニヤンは現世を支配する世俗の法の権力によって投獄されたわけだが、決してその権力に妥協してすがりつこうとはしなかった。それに対してクリスチャンは、Mr Worldly-Wiseman の忠告を聞き入れ、進むべき道から外れて Legality のところへ助けを求めに行こうとして立往生してしまう。クリスチャンは Mr Worldly-Wiseman の言葉の正邪を判断できなかったのであり、彼と出合うという出来事の意味するところを正しく解釈できなかったのである。巡礼者にとって、解釈するという能力は天上の都に受け入れられるために身につけなければならない技量なのである。その技量を集中的に習得するために、Interpreter の館が用意されている。そして、そこで解釈の経験を経た後、'burden' が自然に取れる Cross に至るのだが、この位置関係は解釈の技量の重要性を示している。

クリスチャンは天上の都までの長い旅程において、何度も不信心者たちによって道を誤らせられながらも、試練を克服し、Evangelist や Shining Ones（天使）に教えを受けながら試練

を理解し正しく解釈する能力を培うことによって、the heavenly Jerusalem に受け入れられる資格を獲得する。しかし、この夢物語を正しく解釈することを求められている読者や、さらにそれを求めているバニヤン自身も、クリスチャンと同じ資格を得たかどうかは定かではない。クリスチャンが天上の都に入った後、バニヤンはその門が閉じられるのを見、そして目が覚めて自分が現世にいることを認識するだけだからである。同様に読者もまた、クリスチャンが天上の都に入ったのを確認した後、本を閉じて再び現実の生活に戻るだけだからである。クリスチャンと同時に天上の都への門までたどり着いた Ignorance がそこから地獄へ落とされるのを目撃し、バニヤンと読者は同じ立場に立って、クリスチャンに対する羨望の念をいよいよ強くしてこの夢物語を終える。「私も一緒でありたかった」(p. 204) という望みとともにこの夢物語を終えるバニヤンは、読者も同じ心情を共有することを期待している。だとすると、彼の想定する読者は彼と同じ信仰を持つ者ということになる。

> In simple terms, *The Pilgrim Progress* ... is a guidebook for the elect in a world peopled by ignorance. It is for that reason that the book makes no attempt to plead or reason with the reader: the reader will either share the conviction of its truth or, like Ignorance, he will not — there can be no middle ground.[6]

解釈の多様性を認めないバニヤンの姿勢を考えてみると、このダットンの説はもっともであるかもしれない。だが、たとえバニヤンが「選ばれた人々のためのガイドブック」を書こうとしたのだとしても、一体誰が選ばれた者であるのだろうか。どうやって選ばれた者であるという確信をいだくことができるのだろうか。予定説といった神学的な問題ではなく、この作品の構成上の問題として、主人公のクリスチャンが最後まで自分が選ばれた者であるという確信を持つことなく巡礼を続けるという事実は、作者の意図に反してかもしれないが、読者の限定を取りはずした。来世に対する不安と救われたいという願望、クリスチャンのこの一般的な心情が広い読者層を獲得してきたのである。ガイドブックとしてではなく、クリスチャンという一人の人物を範例として提示する読み物(ナラティブ)として小説の先例となり、広く読まれてきたのである。そこで、この作品の小説的要素について目を向けてみたい。

再びタイトルページを注目してみると、この巡礼の旅は、"FROM / THIS WORLD, / TO / That which is to come" とはっきりと記されている。巡礼の旅の主人公が来世に至ることがここに示されており、すぐにその主人公の名前がクリスチャンであることが告げられる時、彼が天国に行けないのではないかという疑いが入る余地はなくなる。クリスチャンは、「私は救われるために何をすればよいのか」(p. 40) という根本的な疑問の念をいだきつつ巡礼を続けるのだが、読者は彼の幸福な結末を予期し確信しながらその旅を見つめることになる。結末は初めからわかっているのであり、結末に至るまでの旅のアレゴリー自体も、読者を困惑させるような難解なものではない。登場人物の名前を聞くだけで、それがどのような人物なのか、神に従う者なのか、それとも神に背く者なのか、ということがほとんど明らかになる。読者が一見して判断に悩むような名付けはされていない。名は体を表すということがここではすべての

登場人物に当てはまる。Obstinate は文字通り頑固であり、Pliable は文字通り意志薄弱であり、Worldly-Wiseman は文字通り世知にのみたけている。すべての登場人物はその名を裏切るような行動はしない。そして、彼らはすべて善悪という二元論の価値観に従って造形されている。善人か悪人か、そのいずれかなのである。この明快で、単純とさえ言ってもいい登場人物の色分けは、この作品の教義的性格を表している。この作品の根底にあるのはあくまで教義的性格なのだ。そして、それは作者による欄外の注釈にも現われている。しかし、そうした事実にもかかわらず、すべての登場人物がその名前にふさわしい行動をとるということ、様々なエピソードそれ自体は parable の域にとどまっているとはいえ、その展開は合理的で読者が予想し納得しうるものであること、これらのことは *The Pilgrim's Progress* が近代小説誕生の重要な要因であるリアリズムを準備していることを意味する。予定説を事実として受け入れたところに作家としてのバニヤンのリアリズムの芽生えがあるのだが、クリスチャンが天上の都に受け入れられるということを事実として、その結末を最初から明示しながら語るということは、この作品を史実を扱う歴史小説の雛型ともしている。クリスチャンが Graceless から Christian という名前になった時、彼が天国にたどりつくことは既に決定されたのであり、それは歴史的事実と同義なのである。歴史的事実について語るのが歴史小説であるのなら、この作品はその題材においても歴史小説たりうるのである。

クリスチャンは将来が決定されたとはいえ、しばしば道を誤る。しかしその過誤は決定された事項を変更することにはならないし、変更されないということを読者も疑わない。それは巡礼の旅が困難であることを示すと同時に、クリスチャンに教訓を与え、彼が天上の住人となるにふさわしい人物となるプロセスを提示するための過誤なのである。この観点から見れば、この作品は教養小説としての性格を持つ。

また、クリスチャンが Faithful や Hopeful と旅を続けながら悪を退治するという構図にはピカレスク小説を思わせるものがある。あるいは、アレゴリーという寓意性に視点を向けるならば、子供向けの読み物として通用可能であり、実際そのようにも受け取られたのである。

このように、*The Pilgrim's Progress* には様々な側面があるが、それはこの作品が様々な側面に逸脱するからではない。近代小説が誕生する以前に、小説についての一般的定義がない時代に、将来の小説ジャンルを統合するような、むしろジャンルの壁を打ち破るような作品をバニヤンは書いたのである。細分化は貧困化にすぎないことを、彼は警告しているかのようでさえある。何もかもその中に飲み込んでしまう飽食こそが小説の力の源となるのであり、そのことを饒舌という小説の美徳によって『トリストラム・シャンディ』は極限まで小説の誕生期において示すことになるのだが、それより先にバニヤンは、スターンとは対極的な方法で小説の有り様の一つを示したのである。饒舌と対極にあるその手法を寡黙と呼んでもよいであろう。

では、バニヤンは何を語らないのか。逆説的なことに、クリスチャンが途中出合った人物に巡礼に出発するいきさつやそれまでの旅について繰り返し語るということが、この作品が寡黙である証左となる。クリスチャンが繰り返し語ることは、既に読者が知っていることなのだ。クリスチャンが天国に受け入れられるという結末を頂点として、この作品が語るのは読者が知っていること、予期できうることだけなのである。Graceless という名であった時のクリスチャ

ンの人となりについては一切語られず、どういう理由によるのかも全く明らかにされずに彼はクリスチャンとなり巡礼に出る。そして彼が天国に至ったところで物語は終わり、それ以降のクリスチャンについても何も語られない。巡礼の旅にのみ焦点が合わされ、物語がそこから逸脱することはないのである。繰り返し語られる事柄は、物語を天国という中心に収斂させる。すべてのエピソードが天国に至るクリスチャンの巡礼の旅に奉仕するのである。

何故、「狭き門」やキリストの「十字架」を越えたところで、Simple と Sloth と Presumption が足かせをはめられているのか。彼らはどうやって「狭き門」をくぐったのか。彼らの 'burden' は「十字架」のところでどうして落ちなかったのか。また、Hill Difficulty でライオンを見つけて引き返す Timorous と Mistrust にクリスチャンは出合うが、何故彼らはそこまで行くことができたのか。その他多くの巡礼にふさわしくない人物たちが「狭き門」の向こう側にいるのは何故なのか。すべてクリスチャンの試練と教訓のためである。彼らが「狭き門」の向こう側にいることは不条理だが、彼らはクリスチャンのためにそれぞれの場所に配置させられているのである。そして、そのクリスチャン自身も、巡礼の旅という物語が収斂するテーマのために旅を続けるのである。とすると、主人公もそのエピソードもすべて、巡礼の旅のためのアレゴリーに奉仕するということになる。『トリストラム・シャンディ』が逸脱し拡散する物語の極北であるとするならば、その対極に、中心へと収斂する引力のような力を持った *The Pilgrim's Progress* が位置しているのである。この中心を見失わないように、作者のバニヤンも読者に要求している。

> Take heed also that thou not be extreme,
> In playing with the outside of my dream:
> Nor let my figure or similitude
> Put thee into a laughter or a feud;
> Leave this for boys and fools; but as for thee,
> Do thou the substance of my matter see.
> ('The Conclusion,' p. 207)

この 'the substance of my matter' とは、言いかえるならば、この作品のタイトルとなっている 'pilgrim's progress' であろう。当然、'progress' であるからには、前＝天国へと向かう歩みそのもの、その過程(プロセス)が重要となる。それを読者に提示するためにクリスチャンは苦難に満ちた巡礼の旅を続け、物語は読者の前で展開する。

しかし、最後に、巡礼のプロセスそれ自体を無効にしてしまうかのようなエピソードが語られる。クリスチャンが天上の都に受け入れられるのを見届けた後、「私」は Ignorance が地獄に落とされるのを見て、こう語るのである。

> Then I saw that there was a way to Hell, even from the Gates of Heaven, as well as from the City of Destruction. So I awoke, and behold it was a dream.
> (p. 205)

こうしてこの物語は終わるのだが、Ignorance が天国の門から地獄に落とされてしまうのなら、天国の門へと至るそれまでの彼の旅は一体何だったのであろうか。クリスチャンの物語がここまで長々と示してきたように、天国の門へと至る道のりは長く険しい旅路なのである。その長さと険しさを物語は語ろうとしてきたのではなかったか。Ignorance の結末は、これまでの物語そのものを無意味にしてしまうのではないだろうか。

「私」は巡礼の旅が無効になりうることを確認した上で最終的に夢から目覚め、語り手として「私」はそのことを暗示しつつ物語を終える。読者は、そのことを知らされた上で本を閉じる。ここで明らかになるのは、Ignorance のエピソードが、夢＝物語＝アレゴリーから現実に戻るためにくぐるべき扉の役割を果たしている、ということである。クリスチャンの物語＝巡礼のアレゴリーは、それが近代小説のリアリズムを準備するものであるにしても、本質においてはあくまでアレゴリーであり、アレゴリーは解釈されて現実に適用されるべきものなのである。Ignorance のエピソードでこの作品が終わるということは、このバニヤンのアレゴリーの本質そのものを示唆しているのだ。

ここで、Faithful がクリスチャンに言った、「語ることと為すことは別物である」(p. 115) という言葉を思い起こそう。それに対してクリスチャンは、「それらは魂と肉体が別物であるのと同じくらい異なっている」と Faithful の主張に賛意を示す。これを敷衍すれば、巡礼の旅にでるクリスチャンの夢を見ること、それを語ること、そしてそれを聞くことは、実際に巡礼に出かけることとは別物であるということである。それはアレゴリーと現実の関係に相応する。バニヤンにとって、語ることは現実を生きることではなくて、現実のアレゴリーを提示すること、であった。アレゴリーは夢と同じように現実へと目覚めなければならない。クリスチャンの物語を語るということ、それ自体がアレゴリーなのだ。*The Pilgrim's Progress* が精神的自叙伝の性格を有するものであるにしても、そこにバニヤンの自己完結はない。バニヤンには説教が待っている。ちょうど、この作品を読み終えた読者に現実の生活が、そして巡礼の旅が待っているように。

注

(1) John Bunyan, *The Pilgrim's Progress*, ed. Roger Sharrock (Penguin Books), p.39. 以下この作品からの引用はこの版により、括弧内にページ数を付与する。

(2) ピューリタンにとっての聖書の絶対的権威については、Peter J. Carlton, "Bunyan: Language, Convention, Authority," *English Literary History*, 51 (1984), 25ページ参照。

(3) Felicity A. Nussbaum, ""By These Words I Was Sustained": Bunyan's *Grace Abounding*," *English Literary History*, 49 (1982), 22.

(4) John Bunyan, *Grace Abounding to the Chief of Sinners*, ed. W. R. Owens (Penguin Books), p.21.

(5) Angus Fletcher, *Allegory* (London: Cornell Univ. Press, 1964), pp.348-49.

(6) A. Richard Dutton, ""Interesting, but tough": Reading *The Pilgrim's Progress*," *Studies in English Literature*, 18 (1978), 445.